

双方向で持続的な高大連携の可能性

— 高校生と大学生の協働学習がもたらすもの —

Possibility of Sustainable High School and University Cooperation in Two-way
— Matters, which is Resulted from Collaborative Learning of High School
and University Students —

川合 宏之*

Hiroyuki Kawai

本稿では、流通科学大学と高大連携協定校で取り組まれてきた「商品開発」の授業に関して、参加した高校生・大学生へのインタビュー・データを収集・分析することで、より実質的な高大連携の授業形式を模索することを目的とした。分析結果から、高大連携において当事者である高校生と大学生の相互作用が特に重要であり、これを活発化させることが教育効果を高めるために最も肝要であることが明らかとなった。

キーワード：高大連携、キャリア教育、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA)、相互作用

I. はじめに

本稿は、高大連携協定校である A 商業高校において実践してきた取り組み内容をふまえ、インタビュー及び観察結果に基づくデータから高校生および大学生の体験と学びを明らかにし、仮説生成 (GTA=グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく質的分析) を行うものである。

これまで、高大連携の実施及びその意義の考察については、すでに多くの報告がなされてきた。そもそも、高大連携における主要な目的の一つは、高校生と大学生によって協同的学習を行うことにある。近年における個別の事例研究は厩大な数にのぼるため、本稿ではそれらの個々の内容を吟味することはできないが、総論として、その協同的学習としての理念を個別の取り組みのなかで十分に実質化することは難しかったと言えよう。先行事例においても、しばしば単発的な取り組みに終始してしまったり、高校と大学のあいだでの調整に労力の過半を割かれてしまったり、といったかたちで、改善の必要性もつねに指摘されてきた¹⁾。こうした高大連携型の授業は近年の教育制度改革のなかで注目を集めてきた。とはいえ、本稿では、まずもって知識注入型ではなく一人ひとりの体験に即したかたちでの授業実践を行うことによって、前述の協同的学習として

*流通科学大学商学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

(2017年3月22日受理)

©2017 UMDS Research Association

の理念を実質化するための方法を検討し、教室の構成員が相互主体としてともにたらしめかける協働的学習としての高大連携型の授業実践のモデルケースを提示することにしたい。

なお、本稿において取り上げるのは、高大連携型の授業実践に基づく分析である。高大連携とといった場合、広義には、授業に限らないさまざまな連携も想定される。本稿において「高大連携」といった場合、それは広義の高大連携の取り組みすべてを指し、一方、「高大連携型の授業」といった場合は、狭義の授業としての取り組みを指すこととする。

II. 本稿の目的

以上の問題提起に基づき、本稿は、とくに高大連携型の授業において主体となる高校生と大学生が、どのような協同活動を行い、また、どのような体験・学びをしているのか、という点について把握することを目的とする。具体的には、実際に高大連携型の授業を体験した高校生・大学生へのインタビュー・データを半構造化面接法によって収集し、質的研究の方法論のひとつである GTA を援用して分析する。GTA は社会学者のバーニー・グレイザーとアンセルム・ストラウスによって提唱された質的調査の手法²⁾の一つであり、インタビュー・データなどに立脚して仮説や理論の構築を目指すものである。3つのコーディング、すなわちオープンコーディング、アクシャルコーディング、セレクトティブコーディングを通じて、質的データからカテゴリーの形成と組織化・構造化を試みるのがその特徴である³⁾。本稿では、しばしば一方向的・単発的なものに終始してしまっていた従来型の高大連携では得られない、参加者の「体験」に基づいた双方向的で持続的な新しい高大連携の取り組みを実質化するための仮説生成を行うことにしたい。また、副次的な視点として、同じように教室という場を構成する相互主体である高校教員と大学教員のあいだでの継続的な授業計画の実践事例としての展望も示すこととする。

III. 本稿の方法的前提について

本稿の根拠となっているインタビューの対象者は、A 商業高校の高校生、およびボランティアとして参加した流通科学大学の学生である。この高大連携は、「商品開発」を目標とする Project Based Learning と呼ばれるもので、プロジェクト型、問題解決型（創造型）、協同（協働）学習といった方法的枠組みに当てはまるといえる。

（1）高大連携型の授業計画及び方法の工夫

ここで、高大連携の方法について付言すると、繰り返す述べるように、従来の高大連携の課題は単発の取り組みに終始してしまうことにあった。この背景には、大学の講義を高校で提供する、いわゆる出張講義型の授業が多かったことが要因として考えられる。そこで、このような課題を解決すべく、本稿では①高校の授業に合わせた授業展開をすることで、持続的な高大連携を可能

にした。また、②より意識の高い学生を集めるべく、参加形態にも工夫をしている。高校生は選択授業として、大学生は有志によるボランティアとして、それぞれ授業に参加している。大学生に関しては、単位認定方式の授業とすることも考えられたが、この方法だと単位取得目的の学生が集まりかねない。このような方法をとることで、高校生、大学生とも高大連携に協力的な人員を確保することができた。

(2) データの質的分析方法について

本来、GTAにおける十分な研究目的の達成に至るためには、相応のサンプルデータ量および調査期間を要すると考えられる。しかしながら、今回の研究の関心(目的)は、これまで教室において職人芸的に行われてきた授業運営の方法を構造化し、アクティブ・ラーニングや学び合いという言葉で指示されるような新しい教室づくりを成功させるという取り組みを実質化するための仮説を生成し、建設的な視点を提示するところにある。現在、文部科学省の各部会でも審議されているように、このような参加型の授業づくりについては、その有効性は広く教育関係者のあいだで認識されてはいるものの、そのような授業経営が首尾よくいくような具体的な方法論についての観察結果の共有、考察については、これからの課題となっているといえる⁴⁾。そこで、今回の研究実施にあたっては、一年間の実際の教室運営という一回起性のサンプルに基づきつつ、教室づくりに参加した学生、生徒の主體的な語りに基づく仮説生成というかたちでの質的分析を行うことにした。具体的には、実際の事業計画に基づくデータを収集し、商業高校というターゲットを対象を絞った上で、キャリア教育の実施にあたっての基礎研究としての知見を公表し、論文化したものである。以下、その理論的な前提について、いますこし詳述することにした。

灘光洋子・浅井亜紀子・小柳志津の理論的な考察によれば、「質的研究は論理実証主義への批判から生まれた」とされ、「合理的パラダイムが前提とする唯一かつ普遍的真理への懐疑、研究者の価値中立性や客観性を所与の条件とする研究姿勢への疑問、現実を因子に細分化しそれらの相関関係をみようとすることで逆に捨象されてしまうものへの視点などに応える知的枠組み」として定義されている⁵⁾。とりわけ、GTA、ナラティブ分析、アクションリサーチといった方法論については、それぞれの特徴、現状においては十分に活用されていない状況などをふまえた上で、分析手順や検討すべき点について詳細に考察されている。こうした理論的考察も踏まえた上で、本稿では、観察者でもある教員をも含めた教室運営のあり方について考察していきたい。以下、実際の分析結果について報告する。

IV. 調査対象について～仮説生成に至る条件の提示～

流通科学大学では、新たな高大連携に向けた取り組みのひとつとして、2013年度からA商業高校の「商品開発」の授業を高大連携科目として構築し運営してきた。この取り組みは、年間を通

じて同じ大学教員と大学生が継続的に関わったものであり、これまでの一方的・単発的な高大連携ではない、というところに特色がある。本稿の分析結果から、継続的かつ双方向的な高大連携こそが教育効果を高めうること、またそのためにどういった条件が求められるのかを示唆することができるかと期待される。

本授業における「商品開発」で企画・開発する商品は、小学校低学年を対象とした「工作キット」である。その特色としては、つくったものに子どもたちが自由に絵を書いたり、工夫を加えたりすることによって、自分だけのものが出来上がるように工夫をしている。また、「工作キット」は、ただ販売するのみではなく、「工作キット」を使用した「工作教室」を小学校や地域で開催し、地域住民と小学生の交流の場を創出することを目指している。したがって、この「工作教室」の取り組みは、地域と学校教育の関わりにも大きな意義を持っている。

本稿は、単に A 商業高校の商品開発の授業成果を発表するにとどまらない。当授業の成果を一般化し、広く学校教育において導入可能な「教室（学びの場）づくり」の方法論を提示することをめざしている。そのため、今回は授業の当事者である高校生と大学生のインタビュー・データを集約し、そこから得られた「体験」および「学び」についての知見を概念化したうえで考察する。特に、本稿は高大連携の効果について注目するものであるため、「商品開発」の授業および高大連携そのものについての当事者の意識を質問している。

なお、インタビューの発言を提示するにあたっては、活字化された録音データを可能なかぎり厳密に引用するが、論文化する上で必要と思われる部分（高校生独自の語彙に対する補足説明、字句の修正、等）については、最低限の表記上の修正を行った。

V. 調査方法とデータ収集の方法

本稿で用いたインタビュー・データは、以下のような方法で収集された。なお、大学生の募集については、有志による方法を採用しており、いずれの学生もボランティアの形で参加している。また、大学生への事前指導は高校教員・大学教員両方から行われている。具体的には、高校教員から授業の目的、授業計画などのオリエンテーションを、大学教員からは商品開発やプレゼンの手法などの知識面、技術面の指導を受け、また、毎回の授業後には大学生、高校教員、大学教員の三者によりミーティングを行った。

インタビューは、2016年1月20日（水）・22日（金）に行い、対象者は、高大連携型の授業に参加した高校生3年生8名と大学生6名の計14名である。インタビューは1人あたり40分で実施した。

インタビュー実施にあたり、次の点を事前に伝えた。

- (1) 今年度の高大連携の取り組みを来年度に生かすために実施します。
- (2) 今年度の高大連携の取り組みを公表する場合にも、話してくれたことは、誰が話したかは

絶対に分からないようにするので、できるだけ詳細に教えてください。

(3) このインタビューは、授業の成績評価とは全く関係がありません。

(4) 思ったことはありのまま、自由に話してください。

高校生については、以下の質問を中心に自由に語ってもらった。

①「高大連携」に関する質問

Q1.大学生との関わりのなかで何を感じましたか？自由に教えてください。

Q2.大学生に何を教えてもらい、何が助かりましたか？

Q3.大学や、大学生に対して、「もっとこうしてほしい」という要望を教えてください。

Q4.大学生へメッセージをください。(どの大学生でもかまいません)

②「商品開発」の授業に関する質問

Q1.今年度の「商品開発」の授業を通しての感想を自由に聞かせてください。

Q2.この「商品開発」の授業を受けたことで、自分自身「成長したな！」と実感できることはありましたか？

大学生については、以下の質問を中心に自由に語ってもらった。

①「高大連携」に関する質問

Q1.高校生との関わりのなかで何を感じましたか？自由に教えてください。

②「商品開発」の授業に関する質問

Q1.今年度の「商品開発」の授業を通しての感想を自由に聞かせてください。

このように、今回のインタビューでは高校生および大学生に対して、主に「高大連携」と「商品開発」の授業内容についての質問を行った。次章以降では、まず高校生と大学生個々の発言内容を分析し、次にその相互作用に着目して分析することとする。

なお、データとしての公平を期すため、明らかに不要と思われるものを除き、有用かどうかわかりにくい発言も平等に掲載している。場合によっては、ここに見られる高校生からのざっくばらんな発言そのものが、高校生と大学生、あるいは教員との相互作用と考えられるからである。

VI. 高校生インタビューの分析

まず、「高大連携」に対する質問からは以下のようなカテゴリーを抽出することができた。

(1) **【高大連携型の授業に対する評価・提言】** (高大連携についての評価／授業内容についての評価／アンケートについて／教科書があったほうがよい／教科書のない学びの大切さ／高大連携を広めてほしい／広報活動の必要性／要望・問題提起)

(2) **【知識・技術の習得、「生きる力」の育成】** (商品開発のイメージの改善／商品開発の知識を学ぶことができた／調べることの大切さを知った／伝える能力について習得できた／スマートフォンの活用の有効性／生徒自身の視野が広がった／メンバー同士で

協働することの大切さ／能動性・主体性の大切さを学んだ／プレゼンテーションについての経験／勉強の面白さについて／文章の作り方を学んだ)

(3) **【異年齢交流の可能性】**(高校生と大学生の違い／世代間交流の大切さ／大学生との交流のメリット／大学生に対する要望／地域社会への貢献)

(4) **【人生選択への寄与】**(人生選択への影響について／進路・就職について／大学進学への希望)

(1) **【高大連携型の授業に対する評価】**は、授業実践に対する評価、今後に対する建設的な提案や問題提起を集約したものである。

教室での教員と生徒との構造的な力関係の差があるため、通常の一斉授業の場合、生徒の意見を吸い上げていくことは難しい。しかし、今回のような協働的な学びの場であれば、このように学生からも対等な立場で声を聴くことができる。今回のインタビュー結果からは、そのような意義を再確認することができたと考えられる。

高大連携型の授業に対する評価としては、ポジティブなものが多い。そもそも、大学生が一年間にわたって授業に参加したことに対して高い評価があった。例えば、高校生Cは以下のように述べている。

「高大連携とかって、大学の先生が難しい講義をしに来たりすることが多いけど、ああいうのは、すごく嫌です。一方的だし、話が難しすぎて余計に大学に対して進学したいという意欲が低下します。」(高校生C)

このように、もともと高大連携に否定的な考えを持っていた。しかし、今回は「今回の高大連携って、毎週同じ時間に1年間ずっと同じ大学生が来るっていうのはすごいなって思いました。しかも授業と一緒に入って、一緒に考えていくことで、いろんなことが学べました。」(高校生C)と述べており、高大連携のあり方自体への評価が変化したことが語られている。

他の高校生のインタビュー内容を見ても、「大学生が高校生の授業に参加し、協働すること」への評価は高かった。要望として、複数の高校生から「他の授業でも高大連携をやってほしい」「高大連携授業の取り組みをもっと多くの高校生に知ってもらいたい」という声が出ていたほどである。

つづいて、(2) **【知識・技術の習得、「生きる力」の育成】**については、商品開発という授業の内容についても言及しつつ、高大連携型の授業によって習得することができる幅広い能力について言及されている。

例えば、高校生Aは「何でも不安になりがちな私でしたが、この授業では、積極的に参加する気持ちが大きくなり、一皮むけた感じがしました。」と述べており、自分の成長を実感している。また、高校生Fは以下のような意識の変化を自覚しているという。

「今まで、人の意見を聞き入れることが苦手でしたが、この授業を通して人の意見も大切だと

ということが学べて、人の意見+自分の意見でより良いものにしようとする意志が出てきました。」
(高校生 F)

現行の学習指導要領でも、他人との協調が「生きる力」の構成要素として明示されていることを踏まえると、今回の高大連携型の授業が「生きる力」を育むものになった可能性を示唆していると言えるだろう。

(3) **【異年齢教育の可能性】**についても重要であると思われる。高校生 A によると、異質な存在である大学生の影響はきわめて大きい。

「大学生と一緒にいると、私たちが考えもしなかったことを教えてもらったり、気付かされたりしました。いろんな年齢の人といると、もっと知りたいと思ったりするようになりました。」(高校生 A)

普段同年齢集団しか存在しない授業の中に、年上の大学生が混じることで大きな刺激を受けたと話している。また、「大学生と関わってみて、改めて思ったんですが、高校生までは答えがあるものを考えると思います。でも大学生は答えがないものを考えることが得意だなと思いました。」(高校生 E) という意見もあった。実際に「大学生は答えがないものを考えることが得意」かどうかはさておき、大学生の存在は、高校生が「学び」に対する姿勢を考えるうえで大きな意味を持っていたことがうかがえる。

これまでの高大連携は、その担い手となる高校生と大学生のあいだに、実年齢にそれほどの開きがないこともあって、異年齢交流、もしくは異年齢教育という側面から検討されることは少なかった。概して、高大連携をはじめとする初等中等教育と高等教育を接続するための取り組みは、大学全入時代と呼ばれる状況のなかで、入試制度改革などの取り組みの一環として、その必要性が指摘されてきた。1999（平成 11）年に中央教育審議会の答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」、あるいは 2006（平成 18）年の改正教育基本法で明確化された教育理念のなかで、高大連携は、AO 入試、推薦入試などの取り組みと並行する入試制度改革⁶⁾の一環として想定されていた。

授業実践を通じて高大連携の可能性に光を当てる本稿の視角からすると、「異年齢教育」という言葉を授業における相互作用の重要性という観点から再定義することもできるだろう。この点については、高校生と大学生の相互作用について考察する第Ⅷ章で詳述する。

(4) **【人生選択への寄与】**についても、複数の高校生から言及があった。高校生 B は次のように述べている。

「商業高校にいます。就職するのは当たり前の事だと考えていました。進路選択に正解はないけれども、大学生と関わることで生徒自身が自分の将来について考えるきっかけにもなりました。」
(高校生 B)

このように、今回の「商品開発」の授業が将来への思いに影響を与えた可能性が指摘されてい

る。他にも高校生 G は「進路を選択する時に大学で商品開発を学びたい、将来商品開発やマーケティングの仕事もいいなど思った事ありませんでした。」「(今回の授業を受けて)私も将来商品開発やマーケティングの研究をしてみたいと思いました。」と話しており、授業を通じて志望する職種の変更があったようである。

(3)の[異年齢教育としての可能性]とも重複する視点となるが、高大連携型の授業はしばしば同質的な空間となってしまうがちな教室運営に風穴を開ける効果があったと考えられる。高校生と大学生という異なる立場だからこそ可能となる学び合いの機会を通じて、商業高校に通う高校生に大学での高等教育への希望を持ってもらう、などの形で、多様な人生選択への視野を広げてもらうことには大きな意義があると言えるだろう。

以上のように、「高大連携」についての質問からは、(1)～(4)のカテゴリーにおいて把握されるように、大学生との相互作用の中で高大連携型の授業に対する考え方を変化させていったことがうかがえる。

一方、「商品開発」についてのインタビュー内容からは、以下のようなカテゴリーを抽出することができた。

- (1) **【創造的な授業運営】** (新しいものを開発することのむずかしさ／授業運営についての発見／商品開発について (ノウハウ等)／企業向けプレゼンテーションについて)
- (2) **【他者との協働性】** (異年齢交流のメリットについて／価値観の多様性についての学び／他者との協働の重要さ／プレゼンテーションの難しさの学び／グループワークとしての授業運営／当事者性、主体性の大切さを学んだ)
- (3) **【自己発見の契機】** (自分自身の価値観の発見・明確化／やりがいを感じる体験／生徒自身の成長への寄与)
- (4) **【人生選択への寄与】** (今後の進路 (就職等) について／大学進学について／大学生活について／大学の授業についてのイメージの変化)

(1)「**創造的な授業運営**」については、いまあるものではなく、世の中にまだないもので、人々のニーズを満たすものを掘り当て、それを具体的な商品として具現化していく、という作業の難しさとともに、愉しさについての発言がみられた。インタビューにおける発言例としては、次のようなものがある。

「大学の先生が、『そもそも新商品のほとんどはヒットせず、世の中から消えていく。この現実を考えると「売れる商品を作る方法」など存在しない』と言っていたことが印象的で、実際にそういうことを体験できて良く分かりました。」(高校生 D)

「工夫一つでいろんな形にできるのはすごいと思いました。初めて自分たちの力で商品を開発してみて、ものを創る難しさを知りました。」(高校生 G)

今回の「商品開発」の授業は、単一の「答え」を持つ「教員」がいたわけではない。自分たち

高校生はもちろん、年上である大学生や大学教員も「答え」を知らない中で、試行錯誤を繰り返すことの苦勞と充実感を体験した、と自覚する高校生が多かった。

つづいて、(2) [他者との協働性]、および、(3) [自己発見の契機]については、それぞれに相補的な視点を含んでいると考えられる。抽出された発言例(文)の数量的に言えば、異年齢交流のメリットについての言及が多く見られた。

「大学生の広い視野とか、様々なことに挑戦していることが参考になり、見習いたいです。」(高校生B)

「最初は何をしたら良いか分かりませんでした。この科目を取ったのは失敗だって思っていました。しかし大学生に手伝っていただき最後には商品提案することができました。」(高校生C)

このように、年上の大学生と協働したことによる不安の解消、評価されることへの喜びが語られている。以上のことから、他者との協働が自己を育み、有機的な成長につながるという一定の効果を上げることができたと考えられる。

そのほか、他者との協働に関する下位カテゴリーとして、高大連携型の授業体験が価値観の多様性を学ぶ契機となったことを読み取ることができる。具体的な発言例として、次のようなものを挙げるができる。

「メンバーで議論しているとみんなと価値観が違うということが分かりました。大学生は、目標に向かうプロセスを大切にしていたけど、高校生は、プロセスよりも結果を大切にしていたような気がします。この授業を通して他人の考えを自分に取り入れることが大切ではないかと思うようになりました。そのためには聞き上手になることが大切じゃないかと思いました。」(高校生B)

以上のように、高校生のインタビュー・データからは、形式的な高大連携ではなく、授業実践における大学生との濃密な相互作用の蓄積としての高大連携型の授業が、高校生の意識や行動に大きな教育効果を及ぼした可能性を考えることができる。

VII. 大学生インタビューの分析

つづいて、大学生に対するインタビュー・データから抽出されたカテゴリーを整理する。やはり大学生はもともと「高大連携」に関する問題意識や知識を持ち、「商品開発」の授業に主体的にかかわっている立場だったということもあって、授業に求めているものや一人ひとりの授業に対する考え方が明確化されていた。

まず、「高大連携」に関する発言をカテゴリー化すると以下の3つとなった。

- (1) [高大連携の意義] 高校生と協働することの意義／大学生自身にとっての意義／教育活動の意義(一般化)
- (2) [高大連携型の授業の位置づけ] 単位認定について

(3) [高大連携型の授業における高校生への動機づけ] 高校生（生徒）の動機づけについて／授業に対する主体性

(1) [高大連携の意義] については、商品開発の成果を出すという結果もさることながら、そのプロセスにおける高校生との相互作用に意義を見出す声が多かった。例えば、大学生 A は以下のように述べている。

「分からないとすぐに聞いてくれるので教えることができるけど、ひょっとしたら間違っているかもしれないことでも素直に聞いてくれるということは、自分もあやふやなまま話をしてはいけないし、話す内容をしっかり考えたり基本を勉強したりしながら話さなくてはならないと思いました。」(大学生 A)

高校生との相互作用の中で、自分の知識や意識が問われることに気づいており、高校生への関わりが自分自身へのリフレクションへつながっているのである。大学生 F も「大学で学んだ商品開発やマーケティングなどの知識が具体的に活かすことが出来てとてもうれしかったです。」とコメントしている。継続的かつ双方向性を重視したことで、高校生のみならず大学生にも自己のあり方を突きつける契機となった。

つまり、大学生が主体的かつ継続的に授業に参加したことで、高大連携の意義は高校生のみならず大学生にも生まれたのである。「はじめに」で検討したように、従来の高大連携研究においては高校生と大学生の連携を試みた事例がほとんど存在しない。自らも学ぶ立場であり、高校生と年の近い大学生が高大連携に関わった本研究は、高大連携研究のすき間を埋めるという観点からも意義深いものである。しかし、それだけではなく、高校生のみならず大学生の教育効果にもなることが、上記インタビュー内容から読み取れる。

次に(2) [高大連携型の授業の位置づけ] については、この「商品開発」の授業への参加が大学の単位として認定されるべきかどうか、ということである。今回の授業は、単位として認定されないものであった。しかし、大学生 C は単位認定しないことにメリットを感じていた。

「『強制でない』ところが良いと思います。強制でないのに参加している人はやる気がある人です。周りがやる気があるからさらにやる気になる。それがやりがいにつながるのだと思います。」(大学生 C)

彼のロジックは、「この授業への参加は自発的であるべきだ」「単位として認定すると強制力が強くなり、自発的でなくなる」というものである。連携している大学側でも、この「商品開発」の授業を単位として認定するべきかどうかについては意見が分かれているが、大学生の自発的な参加を促すという観点が重視されている。それは高校生の教育効果を高めるためであり、前述の通り大学生にとってのメリットを最大化するためでもある。

(3) [高大連携型の授業における高校生への動機づけ] は、プロジェクトを進めるプロセスで悩んだことや苦勞したことを主に述べている。特に大学生 B は、以下の通り高校生の動機づけ

に苦勞したようである。

「高校生のやる気を引き出すのが難しかったです。一人ひとりに接するのは簡単だけどグループになると難しい。グループになるとしゃべらなくなってしまう人がいたり、他の人の意見に流されてしまう人がいたりしました。やる気がないふりをしているというか、みんな自分がないというか、他の人の様子を見ているという感じがして雰囲気作りに苦勞しました。」(大学生 B)

「一人一人の性格や、同じグループ高校生どうしの仲の良さとか、人間関係を知るのに最初はとまどいました。まずは大学生が一人一人と仲良くなったり、高校生どうしが気軽に意見を出し合える空気になるようにしました。」(大学生 B)

今回の「商品開発」の授業において、大学生は「模範解答」を持つ立場では全くない。それでいて、授業実践の補助的な立場であり、高校生と全く同等というわけではない。したがって、教員のような立場で議論を促すことも難しく、そうかと言って何もコメントせず高校生に議論をゆだねることもできない。そうしたジレンマの中で、高校生が依存しない程度に意見を引き出し、人間関係を調整しつつプロジェクトを進めることが大学生には求められた。

大学生 B は「高校生の中でリーダーを作ることが本当はできればよかった」としながらも、最終的には「大学生がリーダーになって高校生のアイデアを引き出すというやり方でやる意味があったと思う」としている。このようなファシリテーターとしてのリーダー的役割は、高校教員や大学教員が果たすことは難しい。年齢や思考のスタイルの近い大学生であったからこそ可能になった役割である。

次に、「商品開発」についての発言を以下の通りカテゴリー化する。

- (1) **【授業の進め方について】** 授業の目標設定について／高大連携型の授業づくりの難しさ／商品開発＝新しく何かを考えることの難しさ／「教える」ための知識、技術の必要性
- (2) **【高大連携型の授業としての意義】** 高校生と協働することの意義／大学生自身にとっての意義／高大連携そのものの意義
- (3) **【小高大連携について】** 小学校との連携について
- (4) **【普通教育と商業教育】** 普通高校出身者による商業教育の実例
- (5) **【商業高校からの大学進学】** 商業高校からの大学進学

この中で特に注目すべきは(1) **【授業の進め方について】** である。このカテゴリーは、先の高大連携に関するインタビューの(3) **【高大連携型の高校生への動機づけ】** と重複しているところがある。高校生と接することで、自分の知識や意識を問い直すきっかけを担ったことが語られている。

ただし、こちらについては授業の進め方に対する提言、反省が見られている。例えば大学生 D は、「商品開発」の授業において目的意識の共有がなかったことを問題視している。

「もちろん商品開発という特性上かもしれませんが、ゴールがない(見えない)と思いました。ゴールがないままグループで『1年間やってきたことがこれです』というプロセスだけがプレゼンという形になって最後に残っていますが、そこから何を得たのか高校生と大学生が共有できるようにできたらもっと良いと思いました。」(大学生D)

「高校生と大学生で、グループ内で意見を出し合って、まとめるまでを体験したことは勉強になりましたが、いつの間にか目標がプレゼンを無事に終わらせることに終始していた気がします。」(大学生D)

同じような意見は大学生Aからも語られている。特に大学生Aは、高校教員にはあまり目標や結果を明確にする意識がなく、それが当初の難しい状況を生み出したと見ている。

「高校生は最初は良く分からないというところから始まっただろうし、特に、高校の先生は授業のプロセスを重視している感じがしました。『商品が出来なかったら出来なくてもよい』という考え方に見えました。でも自分たち大学生は、なにがなんでも結果を出すという考え方です。結果が出ないと自分たちが関わる意味がないような気もしました。プロセスを重視しているように見えた高校の先生だから、あまり高校生に目標については話をすることもないだろうし、良く分からないまま始まった高校生と、最後には形にしたいと目標を重視している大学生の考えの違いを色々アイデアを出し合いながら、話し合いながら、最後にまとめるところまで持っていくことが大変でした。」(大学生A)

もともと、この高大連携型の授業を実施するにあたっては、高校教員と大学教員のあいだで、あまり明確な目標を設定しないという方針を立てていた。それは生徒の創意工夫に期待するところがあったからである。しかしながら、実際に参加した大学生からは、具体的な到達点、授業のたまかな目標を示したほうが良いという考え方があった。

次の(2)【**高大連携型の授業としての意義**】についても、高校生と協働する意義、ひいては自分自身にとっての意義が大学生の口から語られた。

例えば大学生Bは、高校生だけでも大学生だけでも今回の授業のような発想は出にくかったと推測し、高校生と大学生が協働したことの意義を強調している。

「大学生だけで商品開発をしても難しかったと思います。同年代で同じ場所で過ごす時間が長い人達だけで話し合っても、色々な意見が出ないだろうなと思いました。高校生は年齢が近いけど、発想が違うなと思って感心することがたくさんありました。でも、正直言って高校生だけで商品開発をすることも難しいと思います。高校生だけだったとしたら、色々な意見ももちろん出なかっただろうし、調べ方とか進め方とかまとめ方とかが上手いかなかったと思います。大学生と高校生と一緒に考えたから結果に結びついたのだと思いました。意見を出し合って色々考えたことでそれぞれでは考え付かない新しい発想が出る経験は大切だと思いました。」(大学生B)

大学生は客観性の求められる研究者ではない。そのため、制度レベルの高大連携の意義ではな

く授業実践における参加者の相互作用に意識が向いたのは当然のことではあるが、それでも授業における「高大連携」が参加者の相乗作用を生み出した自覚がここでは語られている。

(4) [普通教育と商業教育] と (5) [商業高校からの大学進学] については、商業高校ならではの「商品開発」という授業の面白さが、特に普通高校出身者から語られた。例えば、大学生 C は以下のように述べている。

「高校時代に受けていた授業は普通教科だけで、ただ教科書を見ながら先生の話をしているだけでした。商業高校の授業は受験のための授業というよりは社会に出て役立つ授業だと思いました。私も高校時代に「商品開発」のような授業を受けていたらもっと勉強が楽しいと感じていたのではないかと思います。」(大学生 C)

「なんとなく大学に進学しましたが、もし高校は商業高校に行っていたら進学する動機とか意欲とかが変わっていたかもしれないと思いました。」(大学生 C)

大学生 C からは高大連携型の授業を通して、自分の高校生活を振り返り、普通教育と商業教育の違いや、自分の大学進学の動機や意欲を問い直すきっかけを担ったことが語られている。

以上を踏まえると、高大連携においてはただ大学生が入れば効果が上がるというものではなく、事前の目的意識やプロセス、最終的に必要となる成果物などを参加者全員が共有できていることが必要、と少なくとも当事者である大学生は意識している。この点は、高校生からは出ていなかった意見である。

VIII. 高校生と大学生の相互作用についての分析

第VI章では高校生インタビューの分析、第VII章では大学生インタビューの分析を行った。これらの分析から明らかになったのは、高校生と大学生の相互作用が今回の「商品開発」の高大連携型の授業におよぼした影響の大きさである。高校生は、少し年上である大学生の「キラキラした」(高校生 G) 姿に刺激を受け、授業に臨む際の意識を変化させていた。大学生は、高校生の「素直さや純粋さ」(大学生 A) に触発され、自分たちの知識やスキル、高い意識の必要性を改めて認識することとなった。

そこで本章では、高校生と大学生の相互作用に焦点を絞って分析を進め、お互いどのような影響を与え合っていたかを考える。そして、高校生と大学生の相互作用の内容、それを可能にした背景について考察する。

第一に、改めて高校生と大学生の相互作用の内容について確認したい。授業のたびに高校生と大学生が会話を積み重ねているのはもちろんのこと、授業に取り組む他人の姿から影響を受けたことが明らかである。

少なくともインタビュー内容を分析する限りでは、高校生の方が大学生の言葉や姿勢から強く影響を受けている。例えば高校生 B は次のように述べている。

「大学生が、『学校での勉強を漠然と受けているだけではだめだよ』とおっしゃっていたのがすごく心に残りました。私はその通り怠けながら？授業を受けているだけだあって痛感しました。」

(高校生 B)

「高校で学んでいることが単に基本なことで、授業に対しての考え方みたいなものが変わりました。自分の興味のあるものを深めていこうと大学に進学することも決めました。」(高校生 B)

高校生 B は、同じグループにいた大学生から向けられた言葉から、進路を変更する(就職するつもりだったが進学することを決めた)ほどの大きな影響を受けた。実際に大学に進学することになれば、高校生 B にとっては自分の人生を変えた「一生もの」の体験になる可能性が高い。実際の発言自体は商品の開発という目的そのものからは離れた抽象的なものではあるが、高校生と大学生の相互作用(会話、話し合いの場の共有)の積み重ねによって関係が構築されたからこそ発せられたものと言えるだろう。

大学生の側からこの種の発言を見てみると、これは授業での話し合いにおける発言というより、高校生の姿を見て大学生が意識的に発したものと推測される。複数の大学生から、授業開始時点における高校生のモチベーションが低かったことが指摘されているからである。例えば、大学生 D は次のように指摘している。

「正直、高校生はみんな最初はやる気を感じませんでした。やる気がない高校生にやる気を出してもらうためにどうしたらいいのかと色々試行錯誤しましたが、自分もゴールが見えていないからどう高校生を引っ張っていけばいいのか最初はよく分かりませんでした。みんなで意見を出し合っていく中でちょっとずつどう進めていくかが見えてきて、方向が見えてきたら高校生がやる気が出できたように思いました。」(大学生 D)

「やる気がない高校生」に危機感を覚え、「みんなで意見を出し合っていく中で」高校生をなんとかモチベートすることができた、と振り返っている。つまり、高校生の反応を見て大学生はコミュニケーションの仕方を試行錯誤し、それに高校生が反応して意識を変えていく、という相互作用が見て取れる。

他にも、大学生 F は「高校生を引っ張っていくつもりが、逆に高校生の熱意に引っ張られながら、1 年間にわたって勉強し、話し合い、考えを深めることができました」と語っており、高校生と大学生相互の「引っ張り合い」=相互作用こそが、今回の高大連携型の授業を進めるための最も重要なエンジンであったことがうかがわれる。

ここから推測される仮説としては、「高大連携型の授業の教育効果を高めるためには、授業に参加する当事者間の相互作用のあり方が重要である」というものである。ここで言う「教育効果」とは、授業を「受ける」高校生にとってのものだけではない。授業に「参加する」大学生にとってのものでもある。授業を「受ける」高校生と授業に「参加する」大学生が、相互作用を積み重ねて立場を超えた「場」が作られることによって、双方にとっての教育効果が高まる、と推測さ

れるのである。

それでは、そうした相互作用は今回の授業実践においていかにして形作られたのだろうか。本章の分析の第二として、上記のような相互作用がいかにして可能になったかをインタビュー内容から検討する。

前述の通り、今回の「商品開発」の授業開始時点においては、高校生のほとんどが「やる気がない」と大学生によって見なされるようなモチベーションの低い状態だったと考えられる。それに対して大学生が危機感を持ったからこそ、高校生のモチベーションを引き出すような関わり方をするようになったと考えられる。

つまり、当事者のうち少なくとも一方が、はじめから授業に参加していたからこそ、もう一方の当事者を活気づけるような関わり方になったのである。単に高校生と大学生を場に放り込めば望ましい相互作用が生み出されパフォーマンスが上がるわけではなく、年上で経験や知識を持った人間なりグループが参加していることが、今回当事者の満足度を上げる要因の一つであった。

また、今回の場合では大学生が自発的に（強制ではなく）参加していたことも大きなポイントであった。高校生Cは、以下のように意識の変化を振り返っている。

「初めは何をしたらよいか分からなかったため、やる気が出ませんでした。やる気がなく、大学生に失礼な態度を取っていました。でも、大学生がボランティアで来てくれていることを知り、とても申し訳ないことをしました。私が大学生だったら、高校へ行ってボランティアをするだろうかって思いました。人のためにこんなに関わってくれる大学生を見て、このままではいけないと思うようになりました。いつのまにか、私も大学まで行って、大学生に教えてもらったりするようにもなりました。大学生に『なんか積極的になったね』、『なんかすごい変わったね』と言われ、恥ずかしいのと嬉しいとの気持ちが混ざっていました。」（高校生C）

高校生Cは、当初「やる気がなく、大学生に失礼な態度を取っていた」。それが変わったきっかけが、「大学生はボランティアで＝自発的に授業に参加している」という事実を知ったことだった。「人のためにこんなに関わってくれる大学生」の存在に、「このままではいけない」という思いを持ったことで、商品開発の授業に積極的に取り組むようになったのである。大学生からも、そうした変化についてのフィードバックをもらったことも、高校生Cにとっては大きな意味のある経験だったと思われる。

大学生Cは、大学生の立場から自発的であることの重要性について指摘している。

「(高大連携型の授業が) 強制だったとしたら、参加する大学生のモチベーションが下がってしまうと思います。そうなると一緒に高校生のモチベーションも下がると思います。いかにやられている感を持たないような雰囲気にするかということがとても重要だと思いました。」（大学生C）

有志による自発的な授業参加だったからこそ大学生のモチベーションが高く、それが伝染する

形で高校生も意欲を持って授業に取り組むようになった。大学生が意欲的で、しかも高校生の意見も尊重するような形に持って行けたからこそ、高校生も自由に意見の言えるような授業づくりが実現したと推測される。高校生にとってもこの授業は選択授業であり、自分から取りたいと考えなければ選択する必要はない。このことも、高校生のモチベーションが高まりやすい条件の一つだったと思われる。

また、当事者が年齢差の小さい大学生であったことも、高校生にとって意見の出しやすい環境作りに寄与した可能性がある。おそらく、仮に当事者として年齢差の大きい研究者が入り込んでも、今回のような質の高い相互作用は生まれなかったと思われる。高校生Cが言うように、大学教員一般に対する印象は「大学の先生が難しい講義をしに来たりすることが多いけど、ああいうのは、すごく嫌」というものだ。少し年上、しかしそこまで自分たちと立場が離れていない（と高校生にとって感じられる）大学生だからこそ、「商品開発」の授業にモチベーションを出したり、「大学に行きたい」と考えるようになったりしたのである。離れていないからこそ、協働的な作業の結果として「仲間意識」が芽生えやすかったのではないか。高校生自身も自覚するとおり、高校生だけでは意見は出にくかった。自分たちとは近いところもあるが異質な存在が外部から入り込んだことが、相互作用の質を高めやすくしたと推測できる。

ここから推測される仮説は、「高大連携型の授業においては、年の離れていない大学生が自発的に参与することが重要である」というものである。

IX. まとめ

本稿では、高大連携において高校教員と大学教員、高校生と大学生の連携の動きがあまりない⁷⁾という問題意識を受け、商業高校における「商品開発」というプロジェクト型の少人数制授業に参加した高校生および大学生のインタビュー・データから相互作用の内容と教育効果や当事者の意識に及ぼす影響を考察してきた。

「はじめに」で述べたように、そもそも高大連携という概念を授業実践というミクロな現場に落とし込んで分析した研究はほとんど存在しない。確かに外部研究者や大学生が高校生の授業に入り込んだケースは多くあるが、単発的な授業であつたり研究者側からの一方的なアプローチであつたりと、高校生との相互作用を見るには授業の回数・方法とも限界があつた。そうした観点からすると、本稿の価値は二点存在すると考える。第一に高大連携を制度論ではなく授業実践の場で分析していること、第二に継続的・双方向的な関わりの中で蓄積された授業当事者間の相互作用に着目している点である。

本稿で強調したのは、高大連携の成否にとって当事者である高校生と大学生の相互作用がいかにかに重要だったか、という事実である。今後高大連携を展開する上で、当事者の相互作用を活発化させることが、教育効果を高めるための最も重要なポイントとなる。そのポイントとして、本稿

では「高校生と大学生が自発的に協働すること」「単発の授業ではなく、継続的かつ双方向的なプロジェクトであること」「教員同士の連携と見守り」「目的の共有」を挙げた。

これまで繰り返し述べてきたように、高大連携型の授業の教育効果を高めるためには当事者同士の相互作用の質に注目すべきである。相互作用の質を高めるためには、授業に参加する高校生や大学生が能動的であり、年齢や環境が離れすぎている必要がある。これによって、高校生と大学生の自発的な協働関係が生まれることを期待できる。

さらに、相互作用の質が高まるまでには時間がかかる。当初、高校生は「やる気がない」と見られていたことから分かります。一般的に見られる単発的・一方向的な「出前講義」では教育効果は限定的と思われる。今回の「商品開発」の授業のように、一定期間一定頻度で顔をつきあわせ、言葉を交わす機会を積み重ねないと、効果的な高大連携型の授業は実現できないだろう。

大学教員や高校教員の役割も重要だ。当事者間の相互作用を引き出すためには、ある程度教員が当事者に裁量を持たせて自由にさせることが求められる。彼らは高校生から見て年齢の離れた大人であり、参与しすぎることによって当事者の依存を招く可能性がある。大学教員や高校教員が高大連携型の授業が「重要である」という大きな認識は共有しつつも、細かいプロセスの管理は当事者にゆだねる度量の広さが求められる。

その一方で、全く何もしないというのも相互作用の質の高まりを遅らせることにつながる。大学生 D が指摘していたように、「やる気がない高校生にやる気を出してもらうためにどうしたらいいのかと色々試行錯誤しましたが、自分もゴールが見えていないからどう高校生を引っ張っていけばいいのか最初はよく分かりませんでした」ということである。今回の授業では、「商品を開発する」という大まかな目標は示されていたものの、最終的なゴールである「プレゼン」についてはどういった企業にどういった形でどれくらいの時間行うのか、などの内容が明示されておらず、当事者に混乱をきたした。この点が明示されたときに授業がどう変わるか、というのは今後の研究課題である。

本稿においては調査できなかったが、教員や大学生によって事前に「ゴール」を明確化し、授業のスタート時点で高校生に明示・共有しておけば、より教育効果の高い授業になる可能性がある。「ゴール」が当事者の裁量を妨げないような配慮は必要だが、今後の授業運営を検討する際に考える余地があるだろう。

また、今回の授業は参加者が 20 名未満という小規模なものであったからこそ成立した。これと同様のスタイルでは、通常のクラス単位の人数（30～40 名）には適さないかもしれない。さらに複数クラスで授業展開したい場合は、教員同士の連携が求められるであろう。

X. 課題

最後に、今後の研究課題を二点指摘する。第一に、前章でも言及した「授業参加者における目

的意識の共有」を挙げたい。大学生の数名から、授業の最初期にテーマや大まかな授業の流れ、最終的なゴールを共有すべきとの意見があった。こうした大学生の意見が正しいかどうかを検証するためには、今後高大連携を実践するに当たって、授業の最初期に目標や求める成果を明確にし、参加者全員（大学教員、高校教員、大学生、高校生）で目標等を共有した形の高大連携型の授業を試みる必要があると考えられる。この授業の結果と、今回の目標をあまり明確に示さない「商品開発」の授業の結果を比較することで、より望ましい高大連携のあり方を模索することができるだろう。

第二に、授業の成果を測定するための尺度について検討しなければならない。前章「Ⅷ. 高校生と大学生の相互作用についての分析」において、両者の相互作用について分析を加えたが、そもそもどのような尺度で授業の成果を測定すればいいのか、より詳細な検討が必要である。本稿では、高大連携型の授業の成果について当事者の主観的な意識＝「満足度」を元に評価したが、それでもそうした意識をどのように測定すべきなのか、という課題は残る。本稿では、あくまで当事者の意識を授業がすべて終わった後のインタビュー結果から質的に分析するというアプローチを取り、授業開始前・プロジェクトの途中・授業完了後の質問紙調査による効果の検討を実施していない。また、インタビューについても複数回実施していないので、当事者の意識の変化を発言内容の変化として具体化することはできておらず、あくまで当事者の振り返りとして意識の変化を事後的に抽出するのみだった。そして、当事者の主観的な満足度を暫定的に教育効果と推定して分析対象とした。今後の研究では、(仮に当事者の満足度や意識の変化を授業の成果とした場合)より緻密に当事者の意識を追えるように複数回の質問紙調査やインタビューを実施すべきであろう。

引用文献、注

- 1) 竹田和夫「高大連携の動向・実践・課題について」、『月刊高校教育』2010年10月号(学事出版、2010年)、45頁。
- 2) Glaser, B.G. & Strauss, A.L. 1967. The discovery of grounded theory : Strategies for qualitative research. Chicago:Aldine. (グレイザー, B.G.・ストラウス, A.L. 後藤 隆・大出春江・水野節夫(訳) 1996. データ対話型の理論の発見－調査からいかに理論をうみだすか－ 新曜社)。
- 3) Strauss, A. L., & Corbin, J., 1998. Basics of qualitative research: Grounded theory procedures and techniques (2nd ed.) . Newbury Park, CA: Sage. (ストラウス, A.L.・コーピン, J. 操 華子・森岡 崇(訳) 2004. 質的研究の基礎－グラウンデッド・セオリーの技法と手順 第2版－ 医学書院)。
- 4) 文部科学省「学術情報委員会(第1回)議事録」(2013年4月11日)。
- 5) 灘光洋子・浅井亜紀子・小柳志津「質的研究方法について考える－グラウンデッド・セオリー・アプローチ、ナラティブ分析、アクションリサーチを中心として－」、『異文化コミュニケーション論集』第12号(立教大学大学院異文化コミュニケーション学科)、2014年68頁。
- 6) たとえば、一部の高校では小論文と面接での入試が行われ、その後、人間性や適性をもとにした大学へ

の推薦入学が行われている場合がある。こうした事例は、主に筆記試験の成績が重視される現在の入学試験を前提とすればイレギュラーな制度であるように思われることもあるが、多様な学生を擁することは教室での議論の活発化にもつながるため、かならずしも否定できないと思われる。

- 7) 小山悦司・赤木恒雄・李麗・呂秀芬・趙恩頤「高大連携事業の成果と課題－高校生のためのサマーカレッジ事例報告」『教育学研究紀要』第49巻第1号、2003年、145-150頁。

【資料】

資料1：「高大連携」についての発言例（高校生）

カテゴリー	代表的な発言例
高大連携型の授業に対する評価・提言	「高大連携とあって、大学の先生が難しい講義をしに來たりすることが多いけど、ああいうのは、すごく嫌です。一方的だし、話が難しすぎて余計に大学に対して進学したいという意欲が低下します。」（高校生C）
	「今回の高大連携って、毎週同じ時間に1年間ずっと同じ大学生が來るっていうのはすごいなって思いました。しかも授業と一緒に入って、一緒に考えていくことで、いろんなことが学べました。」（高校生C）
	「同じ高校3年生だけで勉強していると、高校3年生だけであることが普通になって、新しい発想とかなかなか出てきません。みんな知識とか考え方も同じです。新しいことを身につけようという意欲もあんまり生まれません。」（高校生A）
知識・技術の習得、「生きる力」の育成	「普通の授業と違って、人と人とのつながりができるのが魅力的でした。何でも不安になりがちな私でしたが、この授業では、積極的に参加する気持ちが大きくなり、一皮むけた感じがしました。」（高校生A）
	「今まで、人の意見を聞き入れることが苦手でしたが、この授業を通して人の意見も大切だということが学べて、人の意見+自分の意見でより良いものにしようとする意志が出てきました。」（高校生F）
	「高校は、何をやるにもクラス単位で行うことがほとんどです。友達関係も同じクラス中がほとんどです。その中ではそんなに自分から積極的にいなくても大丈夫です。でも今回大学生と一緒に1年間活動する中では、積極的にコミュニケーションをとることが大事でした。」（高校生A）
異年齢交流の可能性	「大学生と一緒にいると、私たちが考えもしなかったことを教えてもらったり、気付かされたりしました。いろんな年齢の人といると、もっ

	<p>と知りたいと思ったりするようになりました。そういう授業がもっと多かったらいいと思いました。」(高校生 A)</p> <p>「大学生と関わってみて、改めて思ったんですが、高校生までは答えがあるものかと思うと、でも大学生は答えがないものか考えることが得意だなと思いました。」(高校生 E)</p> <p>「高校生の勉強って、先生の言われることを覚えることが中心です。新しいことを生み出したり、考え出したりすることがとても苦手だと思いました。ひとつのことに対して様々な方向から意見を言える大学生のような考え方をできるようにしたいと感じました。」(高校生 C)</p>
人生選択への寄与	<p>「商業高校に在ると、就職するのは当たり前の事だと考えていました。進路選択に正解はないけれども、大学生と関わることで生徒自身が自分の将来について考えるきっかけにもなりました。」(高校生 B)</p> <p>「商品開発の授業を受けるのと受けないので、自分の人生は違ったと思っています。進路を選択する時に大学で商品開発を学びたい、将来商品開発やマーケティングの仕事も良いなと思った事ありませんでした。」(高校生 G)</p> <p>「(今回の授業を受けて)私も将来商品開発やマーケティングの研究を試してみたいと思いました。」(高校生 G)</p> <p>私は専門学校に行こうと思っているので、あまり他の進路を考えたことがありません。でも、大学生と話をするうちに、大学がすべてではないけれど、将来を考え直すキッカケにもなりました。(高校生 C)</p>

資料2：「商品開発」についての発言例（高校生）

カテゴリー	代表的な発言例
創造的な授業運営	「大学の先生が、『そもそも新商品のほとんどはヒットせず、世の中から消えていく。この現実を考えると「売れる商品を作る方法」など存在しない』と言っていたことが印象的で、実際にそういうことを体験できて良く分かりました。」(高校生 D)
	「工夫一つでいろんな形にできるのはすごいと思いました。初めて自分たちの力で商品を開発してみて、ものを創る難しさを知りました。」(高校生 G)
	「商品開発って、今あるものではダメで、全く新しいものを創りださ

	<p>ないといけません。自分が考えたことをうまくまとめられるようになったと思います。」(高校生 D)</p>
他者との協働性	<p>「大学生の広い視野とか、様々なことに挑戦していることが参考になり、見習いたいです。」(高校生 B)</p>
	<p>「メンバーで議論しているとみんなと価値観が違うということが分かりました。大学生は、目標に向かうプロセスを大切にしていたけど、高校生は、プロセスよりも結果を大切にしていたような気がします。この授業を通して他人の考えを自分に取り入れることが大切ではないかと思うようになりました。そのためには聞き上手になることが大切じゃないかと思いました。」(高校生 B)</p>
	<p>「他の授業は個人で授業を受けているという印象でしたが、この授業はグループで授業を受けているという印象でした。」(高校生 A)</p>
自己発見の契機	<p>「最初は何をしたら良いか分かりませんでした。この科目を取ったのは失敗だと思っていました。しかし大学生に手伝っていただき最後には商品を提案することができました。」(高校生 C)</p>
	<p>「この授業は、正直、楽だと思って選択しました。しかし毎回高校生や大学生と議論したり、授業時間以外も準備をしたり、休みの日に工作教室をしたり、商品開発のプレゼンをしたりと、他の科目よりも大変な科目でした。最初は、楽をしようとして取った科目。でも結果的には、高校3年間で一番成長できた科目でした。」(高校生 C)</p>
	<p>「なんか今までは、相手の顔色を伺いながら話していましたが、商品開発の授業では相手の意見をしっかりと受け止めることができるようになりました。」(高校生 G)</p>
人生選択への寄与	<p>「大学の勉強は、高校の商業の勉強が延長しているものだと実感できて、イメージは大分変わりました。大学の勉強へのイメージが変わりました。」(高校生 H)</p>
	<p>「元々就職するつもりだったけど、いままでの勉強のとは違うことが大学でできることを知って、将来の方向性が変わりました。もっと今の勉強を深くしていくのもいいなと思うようになりました。」(高校生 E)</p>
	<p>「商品開発のイメージが私の想像していたものと、違うのでとてもビックリしました。普通に商品開発を学ぶだけでなく、楽しかったし、大学の授業は楽しそうだと思いました。」(高校生 F)</p>

資料3：「高大連携」についての発言例（大学生）

カテゴリー	代表的な発言例
高大連携の意義	「分からないとすぐに聞いてくれるので教えることができるけど、ひょっとしたら間違っているかもしれないことでも素直に聞いてくれるということは、自分もあやふやなまま話をしてはいけないし、話す内容をしっかり考えたり基本を勉強したりしながら話さなくてはいけないと思いました。」（大学生A）
	「大学で学んだ商品開発やマーケティングなどの知識が具体的に活かすことが出来てとてもうれしかったです。」（大学生F）
	大学生が中心となって授業を運営できるので、「次は何をしよう」と考えた。高校生の様子とか反応を見ながらやり方を変えてみたり、進め方を決めてみたりと試行錯誤しながらも、やりがいや責任感も感じました。（大学生C）
	年齢の違い、普段は関わることのない高校生と一緒に課題に取り組むことはとても面白いと思いました。大学に通っているだけだと、一緒に活動できることはほぼありません。（大学生E）
高大連携型の授業の位置づけ	『『強制でない』ところが良いと思います。強制でないのに参加している人はやる気がある人です。周りがやる気があるからさらにやる気になる。それがやりがいにつながるのだと思います。』（大学生C）
高大連携型の授業における高校生への動機付け	「高校生のやる気を引き出すのが難しかったです。一人ひとりに接するのは簡単だけどグループになると難しい。グループになるとしゃべらなくなってしまう人がいたり、他の人の意見に流されてしまう人がいたりしました。やる気がないふりをしているというか、みんな自分がないというか、他の人の様子を見ているという感じがして雰囲気作りに苦労しました。」（大学生B）
	「一人一人の性格や、同じグループ高校生どうしの仲の良さとか、人間関係を知るのに最初はとまどいました。まずは大学生が一人一人と仲良くなったり、高校生どうしが気軽に意見を出し合える空気になるようにしました。」（大学生B）
	「やる気のない高校生にやる気を出してもらうためにどうしたらいいのかと色々試行錯誤しましたが、自分もゴールが見えていないからどう高校生を引っ張っていけばいいのか最初はよく分かりませんでしたし

	<p>た。みんなで意見を出し合って行く中でちょっとずつどう進めてい かが見えてきて、方向が見えてきたら高校生がやる気が出できたよう に思いました。」(大学生 D)</p>
--	-----------------------------------------------------------------------------------------------

資料4：「商品開発」についての発言例（大学生）

カテゴリー	代表的な発言例
授業の進め方について	<p>「もちろん商品開発という特性上かもしれませんが、ゴールがない(見えない) と思いました。ゴールがないままグループで『1年間やってきたことがこれです』というプロセスだけがプレゼンという形になって最後に残っていますが、そこから何を得たのか高校生と大学生が共有できるようにできたらもっと良いと思いました。」(大学生 D)</p>
	<p>「高校生と大学生で、グループ内で意見を出し合って、まとめるまでを体験したことは勉強になりましたが、いつの間にか目標がプレゼンを無事に終わらせることに終始していた気がします。」(大学生 D)</p>
	<p>「高校の先生は授業のプロセスを重視している感じがしました。『商品が出来なかつたら出来なくてもよい』という考え方に見えました。でも自分たち大学生は、なにがなんでも結果を出すという考え方です。結果が出ないと自分たちが関わる意味がないような気もしました。」(大学生 A)</p>
高大連携型の授業としての意義	<p>「大学生だけで商品開発をしても難しかったと思います。同年代で同じ場所で過ごす時間が長い人達だけで話し合っても、色々な意見が出ないだろうなと思いました。高校生は年齢が近いけど、発想が違うなと思って感心することがたくさんありました。でも、正直言って高校生だけで商品開発をすることも難しいと思います。高校生だけだったとしたら、色々な意見ももちろん出なかつただろうし、調べ方とか進め方とかまとめ方とかが上手いかなかつたと思います。大学生と高校生が一緒に考えたから結果に結びついたのだと思いました。意見を出し合って色々考えたことでそれぞれでは考え付かない新しい発想が出る経験は大切だと思いました。」(大学生 B)</p>
小高大連携について	<p>「工作教室を通して、小学生に説明が難しいと感じる場面がたくさんありました。高校生と大学生の年齢差はあまり感じませんが、小学生の年齢差を感じる事が多くありました。」(大学生 E)</p>

普通教育と商業教育	「高校時代に受けていた授業は普通教科だけで、ただ教科書を見ながら先生の話をしているだけでした。商業高校の授業は受験のための授業というよりは社会に出て役立つ授業だと思いました。私も高校時代に「商品開発」のような授業を受けていたらもっと勉強が楽しいと感じていたのではないかと思います。」(大学生C)
商業高校からの大学進学	「なんとなく大学に進学しましたが、もし高校は商業高校に行っていたら進学する動機とか意欲とかが変わっていたかもしれないと思いました。」(大学生C)